

樗良發句集

南勢無爲庵のあるじ、しば／＼洛に寓居の時、このかみ玄化なるものつねにゆきかよひて、主が句を集メ梓にせん事を乞ふ。主の云、我この一筋に心を遊ばし、或年はむさしのゝ露にわけ入、あるとしは越路の雪にさまよひ、興にうかれ時にのぞめば、いたづらに言出せることくさもあめれど、忘れがちにして、まいとめをける物なく、今はたおもひいでんもむづかしなど、いなみ聞えけれど、そゝなかす事(あ)またたびに及べば、是非なく筆を染て、心とめたるほ句百吟かいつけくれぬ。時にこのかみまなく病伏て、つゐに身まかり侍れば、おこたりにして三とせを過る霜月、主も古郷無爲庵に世をさり、今や亡主が記念といひ、かつは亡兄が遺志といひ、やつがれ其しりへにありて等閑ならず。此を社中何がしくれがしに告に、草稿を閲して、たれ／＼のいへる、亡主風雅にとみて世のほまれめてたゝへ、名だゝる秀吟多くは稿にもれたり。これみづからよしとせずして捨たるもあるべく、はたかいつけ落たるも有べければ、ほゐなしとて、人ゝの口にのこり耳にとゞまれるをあつめ、あるは文のはしよりも拾ひもとめて、そが中三百章えらび、乾坤の巻して樗良發句集と題する事を、甫尺序にいふのみ。

樗良發句集 天

春之部

あめつちや實^実もはへある春の色

相模國片瀬の里に春をむかへ、

江の嶋山に神路山を思ひ寄て

ふるさとの伊勢なを戀し初日かけ

むつましやもろ人競ふ花の春

熊野の岐川菴に春たつ日

山くやさくらの中の花の春

ふるとしの儘にて脱かへもせぬ

衣の袖に、ひがし山の朝日かゝ

やきて、けふや春の色のきよら

なるにおどろく。

袖口に日の色うれし今朝の春

眼前に白根を見て春をむかふ

甫尺著

心よりたつやしらねの春霞
鳥の羽に見初る春の光かな

梅

白梅や春毎に見てめづらしき
谷口やこゝろすゞしき梅の花
むめが香に誰も來ぬこそうれしけれ
匂ひして隣の梅の見えぬかな
暮る日や庭の隅よりうめの影
白梅や譽て這入らるゝ舅どの
しら梅や垣の内外にこぼれちる
んめの花なかばひらきて盛かな
梅が香や風にみだるゝ糸のどし
梅が香や折とる心はづかしき
門あけて朝から梅のにほひ哉

閑居

梅が香におどろく梅のちる日哉

うぐひす

鶯の古聲したふ初音哉

しのゝめやうぐひす啼て松の風

うぐひすやよきほどゞ、の聲の間

曉に鶯なくや裏のやま

黄鳥の啼やきのふの今時分

うぐひすや春の山里風けぶる

野外

鶯の山越見ゆる海のどか

柳

すかし見て星にさびしき柳哉

旅人の見て行門のやなぎ哉

菴室や柳をもるゝはなし聲

白雲を目當に野邊の柳かな

もつれつゝ見事や雨の糸柳

はからずも見てもどりたる柳哉

霞

うた諷ふ薪士かすむ山邊かな
鳥もろとも野に出し我も霞らん
殘月に日のうつりつゝ朝霞

題混

きのふけふやゝあらはるゝ若菜哉
若菜つみ野になれそむる袂かな
春の雪風ふきあれて日の暮る
山寺や誰も参らぬねはん像

今江湯に船をうかべて

船に寐む我に過たる春の興

秦夫亭を訪て

風流や窓の白梅軒の竹

春雨

鳥ぬれて猶色ふかし春の雨
夜はうれしく晝は静なり春の雨
花鳥をおもふや夜のはるの雨

旅宿

柳をりく壘にふるゝ春の雨

和歌浦にて

春雨や松に鶴なく和かの浦

山吹

水越して山吹あるゝわたり哉

湯尾峠にて

やまぶきの花吹とぢよ雪あらし

花

雨風のあらきひまより初櫻
人傳に聞て悔けりはつざくら
花を照らし月又花にくもる哉

過行ば又見えそむる櫻哉

四五日や花に天氣の片心

花ざかり鳥のたよりに曇けり

油斷して花に成たる櫻かな

四方の花に心さはがしき都哉

ちる花やまぎれて見へぬ人の顔

一時やあたら櫻の咲みだれ

引組て轉たり花に酒の酔

見かへればうしろを覆ふ櫻かな

散さくらつらくもまさる見事哉

閑居

しづかさや散るにすれあふ花の音

御室にて

もろ人や花を分入花を出す

嵐山にて

雲高く風たえて花のあらし山

めざむるや花吹おろす大炊川

草庵に陸史をとめて

食をわけて樂みたれり軒の花

前山花見

櫻はけふをさかりにて、麥畑の

縁に薺をしき、空豆の中に盃を

とる。山の半腹には暮をうち、

峰には人子て人を呼。人花をな

ぐさむならん歟。花の餘情をそ

こなふならんか。

人のあたまた花に隠るゝ麓かな

蛙 蝶

蛙啼や水玉うかぶ春の水

たはれ來よ袂に入ん飛胡蝶

野子が妻の身まかりけるに

まぼろしに瘦顔見へて梅白し

名のみしりてま見へざる人の悼

逢はぬのみ歟遠き別を春の夢

暮春

蝶が身の人よりかなし春のくれ
花ながら春の暮るぞたよりなき
放下師の眠のひまに春ぞ行

安永七三越路行

ことしの春は心おとろへ、筋骨
からみ、たましひの静ならざれ
ば、加賀の國山代の温泉にあそ
ばんとおもひ立出る。山路さむ
けれどやよひのすゑなれば、桃
さくら山吹など咲みだれたり。

花にこそ命惜けれ春の暮

夏之部

ころもがへ

春をおしむ心の外に衣がへ

ころもがへ鳥はくろく驚白し

題混

つみ花や刀にむすぶ山法師
うの花の中に崩れし庵かな
世をいとふ我はづかしやかんこ鳥

時鳥

ほととぎすあやしく過る初音哉
はつねしてなをまたれけり郭公
時鳥畫の初音ぞうらみなる
ほととぎす二聲聞しはつねかな
杜鵑はるかにもどる深山かな
ほととぎす啼やちらりと月に移り
松の葉に下腹つくな子規
時鳥聞なをす間に遠音かな
ほととぎす曉にせまる高音哉

卯月十日、人々にひかれ三條

の西に出はなれければ、あけぼ

の雲、山々のこしをめぐり、

畑のつくりもの、おのがさま

くに露を帯ていさぎよし。時

鳥しきりにこひしくて

ほととぎす野山に聲のすがたあり

比叡山にて

大日枝や麓を横にほととぎす

須磨にて

郭公のなみだに曇れすまの月

串のさとにて

北國や雪の中なる青あらし

今江にて

裸身や水鶏を尻に蛭とり

くひな啼や幽になりし我心

加茂川夜行

水鶏なけ夜の市人酒の酔

夏の日、竹の一むらかこみたる

はいとめさむる心地こそすれ。

めづらしや水鶏の遠音竹をうつ

病中

病中や旅寐の水鶏蚊帳に聞

まつり

吳竹のよゝにあふひの祭かな

鈴にも響くまつり太鼓かな

中々亭にて

葵艸むすびて古きあそび哉

題 混

かりそめに見て過がたしきつばた
君が代や銚たてかざるくらべ馬
五月雨や折く出る竹の蝶

波泉の祝事有ければ

ことぶきや龜のひたひの花あやめ

金閣寺にて

こがね錆て若葉にしのお昔哉

燕釣 鶴飼

おそろしや燕つる男妻はなきか

鶴遣ひを見に來し我ぞあさましき

蘭臺子へ留別

別かなし身は五月雨の菰一ッ

留別 三句おのく別書略

まねきあふ扇に寒きうしろ哉

時鳥歟花歟戀路か此わかれ

わかれ路や今朝短夜の夢千里

佛が原にて

おもかけや佛酒賣苔清水

ほたる

もつれつゝ水無瀬をのぼる螢哉

山や水見えてはくらみ散ほたる

宇治川やよしのゝ花をちる螢

入佐山眺望

月にゆかし照射にかなし入佐山

櫻峠のぞみて

六月や天の橋立しぐるゝ歟

納涼

涼風や我にふるゝもおしまるゝ

すゞしさを袖にさし入る海の月

すゞしさを旅に出る日の朝ぼらけ

奥山や月花やかに風涼し

涼しさや松の木の間よりもゝ風

加茂川にて

水音の袂にこたふすゞみかな

湖水に舟を浮て

すゞしさを船に吹入るゝ涙の露

たえて迷ざりし人にあふて

嬉しさとすゞしさに心亂けり

都に庵をもとめて

みな月の朝貌すゞし朝の月

萬平亭にて

梅が香も月のなさけも夏一夜

羅外上人の塚に詣侍りしに、愛

し給ふ蓮はめてたく花咲て、お

りくごとの風のかほりに、い

にしへを我にかたると見えて

蓮咲て花物いはす泣もせず

夕貌 瓜

ゆふがほの中より出る主かな

水よりもわづかに涼し瓜の色

延々子の旅宿にて

涼かぜの尊き森の宮るかな

故山を草庵にとどめて

稀人の寐姿うれし蚊帳のやれ

麻青庵に添書を貰て

わすれめや扇にむすぶ文の數

百史亭にて

言葉盡て扇に畫し雪しぐれ

今更や目にみな月の水寒し

悼 名 越

六月晦日加茂の社に詣て、み
たらしのながれにあそぶ。

泪して命うれしき御祓かな

樗良發句集 地

秋之部

かくこそとわかで今朝より秋の雲
秋たつや雲はながれて風見ゆる
目に見えぬ秋にこゝろの弱りかな

あさがほ

朝貌や露もこぼさず咲ならぶ
あさがほにあぶなき棒の稽古かな
葉の露に朝貌の花のうつりけり
露やわづかのうちを日のあたる

悼

あさがほにかはるうき世や七ゝ日

七夕

逢夜とてめでたき星のひかり哉
たなばたや兒の類に笹のかげ
露の間を世にふる星のあふ夜哉

かなしさをかさぬる星の一夜哉

魂まつり

なき父の膝もとうれし玉まつり
たま祭り茄子に見ゆる母の顔

南都より紀の路へおもむく頃、

旅宿の吟

奈良初瀬めぐりて旅の魂まつり

懷舊

巴雲老人が去年の旅姿、ことし

難波の蘆のかげにあらはれ見え

て、其魂のかへり來たるをしる。

魂まつり雪も時雨の袖の露

秋かぜ

あさがほに吹そめてより秋の風
柳にも竹にもよらず秋のかぜ

鬼の畫譜

物のあはれは秋こそまされ

秋のあはれは夕こそまされ

なけくそと我をせめけり秋のかぜ

述懷

老が身やかりそめならぬあきの風

題混

すまひ取扇遣ひの見事かな
花桔梗名のみの色を咲にけり
見るうちや風の吹折れ女郎花
あはれさに折て持けり花木植

萩

秋はぎのうつろひて風人をふく
戀よりもくるしき萩のみだれ哉
萩が根に月さし入て風ほそし
縁先やよべに見残すけさの萩
風あれて萩にうれしきかぎり哉
吹分るひまもあらしの庭の萩

むし

虫ほろ／＼艸にこぼるゝ音色かな
むし啼や木賊がもとの露の影

八朔

燕々亭にて

八朔やかたびらさむし酒酌む
あはれとも見るにたえたり三日の月

良夜

嵐ふく草の中よりけふの月

名月や只うつくしくすみわたる

雲を拂ひ雲にたゞよふ風の月

たのしみや松にかくれしけふの月

うらめしきまでに月すむ今宵哉

山風のあるかなきかに今日の月

年／＼にこりて月見ぬ今年かな

畫譜

狩くれて馬のうへなる月見哉

石山にて

ことなるや實石山の秋の月

安宅の關は名のみして、海のお

もて十餘町を望む。

月のみぞ花の安宅は海の雲

更科にて

姥捨やあだにかなしき夜半の月

十六夜 後の月

いさよひや闇より出る木ゝの影

後の月水よりも青き雲井かな

見事なり薄雲はしる後の月

雁

はつかりや月のほとりより顯るゝ

雁金のかさなり落る山邊かな

うどん焚空や雨夜の雁の聲

落もはてす迷ひめぐるや雨の鴈

親しらずにて

荒磯や初雁渡るしほけぶり

湖水眺望 二句

夕ぐれや露にけぶれる鴉の海

山も岡も芙蓉に露を置がどし

鹿

夜もすがらなかで曉の鹿の聲

おのれのみとかなしく鹿の啼音哉

朝しかや櫻の林を出ること

秋の夜や時雨る山の鹿の聲

題しらず

賣切の鯨のあたひや大唐親

親だねに餘所へ出かけの指圖哉

篠原にて賞盛の魂をなぐさむ

命かな露よりもかろく月よりも白し

おなじく兜を見て

背きえてかぶとに残る秋の聲

井波なる白波水

世に古し薄が中のいづみかな

忠度の塚にて

時なれやかぼちやの煮入なみだなる

菊

露の菊さはらば花もきえぬべし

しらぎくや心あまりてねたましき

夕風やさかりの菊に吹渡る

花と花さはりてきくのこぼれ哉

物入や屋形つくりて菊の花

白ぎくやあたりも俱にうるはしき

青竹にかゞやく菊の盛かな

菊の花こゝろ憎さに手折けり

おもふ事ありて

露もちれうきがうへなる野分の日

なま中にしらでもよきに秋のくれ

斧亭にて夜話

ながき夜や眠らば顔に墨ぬらん

半化房をたづねて

秋のはれあるじはうらみ我は泣

越中の國井波なる所に浪花公、

芭蕉翁の剃髪を埋み、碑を建給

ひ、其角筆をととりて、はせを翁

と書たり。なつかしき事のかぎ

りなければ

野さらしの露よしぐれよ剃髮塚

おなじく此地に遊ぶ頃、長兵衛

庵より眺望して

時雨來よ花も紅葉(も)有磯海

楚丁亭にて

したしみは花八重菊のかさね哉

龍石にわかるゝとて

秋ぞかなし後の世の友に契り置ん

紅葉

見めぐるやもみち靜に色まさる

谷川や紅葉の絶間水寒し

落葉さへ紅葉の山の高雄かな

黒部川をのぞむに、愛本の橋は

兩岸の巖より剣上て高き事數十

丈、川水白波をたゝみ、早き事

眼をくらまし、吾は心を轟かす。

水烟四方に起て雨中の雲に交り、

物凄くもいさぎよし。暫橋上に

イテ

橋高しもみちを埋む雨のくも

あらし山にて

花や紅葉松も常ならず嵐山

幕凄し金氣あふるゝ大み川

北國病中吟

骨をたゝき肉をふるふか北の秋

詩雀亭にて

まじはりやもみち照そふ小盃

留別

爰で死ぬといへどもきかず行秋や

洛西にさまよひあるき秋をおし

む

嵯峨にさへとまらぬ秋の行衛哉

老懷

秋のする身もふるはれて虫の聲

行秋やあはれ非情の草も木も

冬之部

しぐれ

秋のあはれわすれんとすれば初時雨
はつしぐれやむやしはしのから錦
降そめてふりもさだめずはつ時雨
此ごろの野邊にまたるゝ時雨かな
吸物を出せば晴行しぐれ哉
ゆふべより降まさりつゝ小夜時雨
立白のぐるりは暗し夕しぐれ
雨にわかち風にまぎるゝしぐれかな

旅行

きのふけふ我身になるゝ時雨哉

題混雜

十夜とてかしこき法の教かな
あきたひや店へ酒出すゑびす講
はつしもや飯の湯あまき朝日和
霜の夜や鴈の羽がき尙さむし

冬ごもり

風あらし曉よりぞふゆごもり
夜々のおもしろければ冬籠

はせを忌三句

旅すがた時雨の鶴芭蕉翁
はせを忌に薄茶手向る寒さ哉
木がらしに古人荷葉の夢さむし

ちどり

消もせん有明月の濱ちどり
小夜千鳥羽風もいとふ聲の瘦
須磨にて

明石にて

一夜聞てはるなきすまの千鳥かな
日は落て波をあかしの夕時雨

鉢たゞき

まぎるべき物音たえて鉢たゞき
兄弟賊同じ聲なるはちたゞき
はちたゞき少し踊て廻向かな
さゆる音の雲井にかよふ鉢叩

寒苦

霜さむや小鳥の足も地につかず

粟津原馬上の吟

こがらしや日も照り雪も吹ちらす

雪

よきほどを越えて雪ふる夕かな
雪ふかし野寺の鐘の聲のみに
白ゆきやあまり深さにのどかなる
枯杉の赤葉さまくに雪うすし

立山眺望

立山や雪に分入鴈の影
立やまの雪白龍ののたり哉

富士山眺望

白妙や雪もろともにふじの雲
大嶋に庵を結て

那谷寺にて

心細し雪やは我を降うつむ
なた寺や池の毘沙門松のゆき

留別

雪によばふ我聲跡に届かし
戀路のあはれなるも、貧のせつ

なるも、やまひのくるしきも、皆
まどを顯のひとつにして、病

て死せざるは、戀て逢ざるに情
ひとしく 加茂川の堤の家を賣
たる貧女も、やまひにふせる武
士に異なる事なけれ。予このご
ろ此ものに犯されて、これが爲
にせめをたのしむ。

海老焼てやまひに遊ぶ寒の中

寒月

あかるさや風さへ吹す寒の月
寒の月川風岩をけづるかな

大日寺にて

角立て居風呂のぞく雪の鹿

太中菴を送る

春來よとあふさか山のわかれかな

病中

月雪や酒を冬瓜に腫やまひ

年暮

とし忘れ廣野の鶴を見に行ん
るねぶれば誰やら起す年の暮
うき事はしらじ師走の鳶鳥
白雪のつもる思ひに年くれぬ

我風狂いたづらに年くれて、軒
の梅さへわすれがちなり。

ゆかしやと見れば見えけり除夜の梅

下の巻終

句三百詠は、亡帥櫻良叟のほ句なり。いたづらにならん事をかなしみ、甲辰の春玄化堂天つちの集を著す。げにや此法師古里無爲庵をいでしより、大嶋に九尺四方のいほりをたて、月雪の夢をやぶり、はた南紀あたしかのさとにあだなるすみどをまうけ、二また庵となむ號。爰に三とせ四とせの春秋を過し、いづこかつゐの住家ならんと、この庵をも藁沓の如くすて、夫より洛木や町に寓居して、浮世の嵯峨の花もみちをながめ、世を宇治川の螢見に、よしのゝ花のちるかとやしみ、みやこの雨にうどん焚夜の雁を愛し、粟津の旅行に木がらしの姿をのこし、立山の雪に西行の魂をさぐり、雨にあらしに心をあそばし、句はあだにしてあだならずとやいはん。只情をかんじ實をうつし、利をいはず巧を求めず、艶をきらふ。花鳥にたはれては、句のおくれん事をなげき、萩薄に姿情のまさらん事をねがふ滑稽の道人なりけらし。嗚呼かりそめにいひ出せる平話さへもおかしかりし。まいて吟章におけるをや。是に洩たるもあまたあるらめ。されど、ものは只と、なふらざらんこそよけれと、此叟も常につぶやけるをもて、もらゝしてんやと、予同友のゆかりなれば荷擔して拙筆をとる。なまじゐにいはゞ拔舌の罪ふかく、かつは高風にたがふなめれば、三ツ二ツをあげて跋書す事しかり。

城南春風亭

秦

夫